

3. 交響曲第6番『田園』 ヘ長調 作品68 (ベートーヴェン)

ベートーヴェン (Ludwig van Beethoven : 1770~1827) は、言わずと知れたドイツの作曲家である。

この交響曲には、ベートーヴェン自身が「Pastorale」という名称を与えている。Pastorale (パストラール) とは、通常は「牧歌」、つまり、“羊飼いの音楽”を指すが、「田舎での生活の思い出」という思いを込めて名付けられた。

すでに作曲家としての地位を確立していたベートーヴェンは、ウィーンの森に囲まれたハイリゲンシュタットという街で静養する。しかし、日ごとに悪化する難聴を苦にして自殺を考えるようになった1802年10月、ついに、遺書をしたためるに至った。この遺書は『ハイリゲンシュタットの遺書』と呼ばれるものであり、書き出しこそ自分の不遇さに絶望しているが、後半になるとそれを芸術家として克服しようとするエネルギーさえ伝わってくる。事実、その後、交響曲第3番『英雄』などを生み出すこととなる「傑作の森」と呼ばれる創作期に入るのである。交響曲第6番『田園』は、そんな1808年に完成した。

この交響曲の趣旨は、ハイリゲンシュタットの田園風景から受けた印象を表現したものである。また、先述の遺書の中で、「誰かが羊飼いの歌声 (Hirten Singen) を聴いていても、私にはまったく聞こえない」と記しているのも、遺書と交響曲を結びつける何かがあるようで興味深い。

さて、曲は、全5楽章で構成されている。ベートーヴェン自身が付けた標題とともに紹介しよう。

第1楽章 Allegro ma non troppo ヘ長調 4分の2拍子

Erwachen heiterer Empfindungen bei der Ankunft auf dem Lande

(田舎に到着したときの朗らかな気分の芽生え)

ソナタ形式で書かれているが、序奏はない。中低音弦楽器のオーゲルプンクト (保持音) に続いてヴァイオリンが第一主題を奏でる。話は少し逸れるが、この「田園 (作品68)」と、同時期に作曲された「運命 (作品67)」には、曲想こそ対極的であるものの、類似する点が幾つかある。その一つは初演が同じ演奏会であったことであるが、冒頭に序奏がない点、「第一楽章の第一主題」が“8分休符”で開始されている点、さらには主題提示の際にその結びに“見得を切る”が如くフェルマータで印象付けを行っている点なども、共通した発想と言えよう。



The image shows two staves of musical notation. The top staff is in G major, 2/4 time, and contains the first theme: a quarter rest followed by a quarter note G, a quarter note A, a quarter note B, a quarter note C, a quarter note D, a quarter note E, a quarter note F#, and a quarter note G. The bottom staff is in G major, 2/4 time, and contains the 'Fate' motif: a quarter rest followed by a quarter note G, a quarter note A, a quarter note B, a quarter note C, a quarter note D, a quarter note E, a quarter note F#, and a quarter note G.

強奏による主題の確保、第1ヴァイオリンによる第一主題のモチーフの繰り返しによる経過句の後に現れる第二主題は、ヴァイオリンが8分音符の下降音形で、田舎の清々しい空気を表現する。



The image shows a single staff of musical notation in G major, 2/4 time. It contains the second theme: a quarter note G, a quarter note F#, a quarter note E, a quarter note D, a quarter note C, a quarter note B, a quarter note A, and a quarter note G.

同時に、チェロの「主題はこっちだぜ！」的な対旋律を伴っている。両者の役割を交換したり、木管楽器に発展させたりして、提示部を終える。

展開部は、提示部のモチーフによる導入の後、ヴィオラとチェロによる三連符の伴奏を従えて、ヴァイオリンと木管楽器が、第一主題の第2小節目のフレーズを交互に繰り返すなどして展開させている。

再現部を経て、芽生えた朗らかな気分とその高まりを示す終結部 (コーダ) を迎えて、終結する。

第2楽章 Andante molto moto 変口長調 8分の12拍子

Szene am Bach (小川のほとりの情景)

この楽章は、田舎道を散歩していると感じることのできる素朴な情景を表現している。標題の小川(Bach)は今でも、ハイリゲンシュタットの「ベートーヴェンの小径(Beethovengang)」に流れているものと考えられている。木々に囲まれて清らかに流れる小川とそれに沿った小径、その雰囲気はどことなく、国分寺市の名所「お鷹の道」に似ている。

さて、構成はソナタ形式となっている。第2ヴァイオリン、ヴィオラ及び独奏チェロが表現する小川のせせらぎにのせて、第1ヴァイオリンが木々の葉の揺らぎを表すような第一主題を奏でる。



第二主題は、小鳥が舞うような印象を下降と上昇の音形で第1ヴァイオリンが表現する。



展開部、再現部を経て終結部を迎えると、フルートがナイチンゲール、オーボエが鶉(うずら)、クラリネットがカッコウを模すことで、長閑な情景を印象付けて終結する。

第3楽章 Allegro ヘ長調 4分の3拍子

Lustiges Zusammensein der Landleute (田舎の人々の楽しい集い)

第三楽章から終楽章までは、切れ目なく演奏される。この点も先述した「運命交響曲との共通点」と言えよう。

この楽章は、田舎の人々が集って自然を満喫している様子を表現している。祭りというよりはピクニックといった感じだろうか。

構成は、「主部(スケルツォ)」－「中間部(トリオ：4分の2拍子)」－「主部の再現」の3部形式となっている(主部－中間部は繰り返して演奏されることが多い)。主部の後半には木管楽器による、おどけたような(もしくは、ほろ酔い加減のような)フレーズがあることから、複合3部形式とする見方もある。

楽しいひと時をかき消すかのように、主部の再現を前半部分で中断し、切れ目なく第4楽章に移行する。

第4楽章 Allegro ヘ短調 4分の4拍子

Gewitter, Sturm (雷雨、嵐)

この楽章は、容赦なく降りかかる自然の猛威を表現している。冒頭の低音弦楽器の刻みは、遠くから聞こえる雷鳴を表している。続いて、雷鳴によって人々が慌てている様子を第ヴァイオリンで、不安な気持ちを第1ヴァイオリンで、それぞれ表現している。すると、雷と雨が迫ってきて、ついには嵐となる。人々が逃げ惑う様子や雷の閃光などをピッコロやトロンボーンを使用することで強調しており、それらの楽器の使用は、この時代の交響曲としては革新的である。これも「運命交響曲との共通点」と言える。

「止まない雨はない」が如く、荒れ狂った天候も徐々に落ち着き、フルートが雲の合間から射し込む柔らかくも明るい日差しを表現すると、曲は第5楽章に移行する。

第5楽章 Allegretto へ長調 8分の6拍子

Hirtengesang , Frohe und dankbare Gefühle nach dem Sturm (牧歌：嵐のあとの嬉しさと感謝の気持ち)

角笛のような導入のあと、ヴァイオリンが第一主題を奏でる。いかにも牧歌的なメロディーで、嵐の後の明るく瑞々しい空気を感じる。このテーマを聞くと、昭和生まれの筆者には、桃屋の江戸むらさき「ごはんですよ！」のテレビCMが思い出される。



クラリネット、ホルン、ヴィオラ及びチェロが強奏で主題の確保をすると、ヴィオラとチェロは続けて第二主題を奏でる。



その後、第一主題が音形をいろいろと変化させて繰り返し登場することから、変奏曲風のロンド・ソナタ形式と考えられる。

曲が終結部に入るとチェロとファゴットが主題を16分音符の流れるようなメロディーとして奏でる。



途中、急に弱音になるが、そこからヴィオラやヴァイオリンが加わり、管楽器が主題を重ねるなどして徐々に音楽が高揚し、自然への感謝の祈りを管楽器と高音弦楽器の長音符で、自然に感謝する嬉しい気持ちをチェロとコントラバスの上昇音形で雄大に表現している。この部分は、数ある名曲の数ある表現の中でも群を抜いて、聴いている者ばかりか演奏している者に対しても胸が高鳴る感動を与える。そして、そんな感激の余韻のうちに、弦楽器が静かに主題を奏でる。その祈りを捧げるような雰囲気は、農民画で知られるフランスの画家ミレーが“お告げの祈り”を描いた『晩鐘』を連想させる。そして、家路をたどるように角笛が遠ざかると、温かく全体を締めくくるのである。

この楽章には、ベートーヴェン自身の、苦悩を乗り越えたからこそ感じることできた「生きる喜び」が前面に表現されている。ハイリゲンシュタットで遺書を書き、そこから芸術活動へのエネルギーが芽生え、そのハイリゲンシュタットでの生活の思い出を作曲することで音楽に感謝する。これも、この田園交響曲のテーマなのかもしれない。

以上